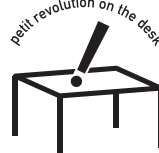




Vol.47

机の上の小さな変革



規模と視点

こんにちは、菅俊一です。今回は「規模のスケールを変化させることで視点を変える」ということについて考えていきたいと思います。

さっそくですが、普段1人でやっている「自分の名前を書く」という作業を、もし2人でやるとしたらどうすればよいのか、具体的な方法を考えてみてください。

ただ、「2人でやる」といっても方法はいろいろあります。たとえば、二人羽織のようにして1人がもう1人の後ろから手を添えて名前を書くというやり方もあるかもしれませんし、名字と名前とで担当を分けて、順番にペンを持って書いていくというやり方もあるかもしれません。



2人で名前を書く方法について想像することができたら、次は同じことを10人でやってみたらどうなるかを考えてみてください。2人だといろいろと想像しやすかったかもしれませんが、10人でとなると大変です。

先ほど例に挙げたような二人羽織の方法は使えないので、まったく別のアプローチを想像する必要があります。一般的に思いつきそうなのは、一画ずつ順番に書いていくような、工程をより細分化して分割するアプローチや、全員細く薄い色のペンを持って、順番に何度も書き書きすることでだんだん濃くハッキリと読めるようにしていく

といった、情報を強化・精緻化していくアプローチなど……。さらに突飛なものだと、ペンに長い棒を取り付けることで10人で同時に持てるようにしてから全員で書く、というようなサイズを拡張していくアプローチもありそうです。

もしかしたらこの文章をお読みのみなさんのなかには、まったく異なる手法を思いついた人がいるかもしれません。

規模が変わると視点が変わる

今回みなさんには規模のスケールを変えて、普段1人でやるようなことを強引に10人でやってみるにはどうすればよいかを考えてもらいました。

規模が変わると、これまでできていたことができなくなってしまうことに対応しなければならない一方で、その人数だからこそはじめてできることもあるはずです。

たとえば、10人いることで役割を分担して高速化できるようになったり、1人でしていた確認を複数人でやることで精度が上がったり。また、全員が同じ問題について考えることで解決策のバリエーションを増やして、1人では考えつかなかった意外性のある答えに辿り着くこともできるようになります。

規模の力を適切に使うことで、新しい価値を生み出すこともできるのです。



PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。